

ほどけきらない距離

— 家族の公私が分断されない住宅の提案 —

本提案は、住居を生活のための装置としてではなく、関係が生成され続ける場として捉え直すものである。家族という関係は固定されたものではなく、日常の行為や時間、距離感の積み重ねによって常に変化していく。本計画では、住居内に人の移動や視線、気配が重なり合う構造を内包させることで、意識的な交流を前提とせずとも他者の存在が生活の中に立ち上がる状況をつくり出す。

同時に、関係は近接だけでなく、離れや揺らぎを内包することで持続するものでもある。連続と分節、接近と距離のあいだを往復可能な空間構成によって、関係を拘束せずに保持する住居像を提示する。



1 背景～分断される現代の住居～

近年、日本の住環境を取り巻く社会状況として、同一世帯内で生活を共にしながらも、家族同士が日常的に顔を合わせる機会が減少していることが指摘されている。少子化や共働き世帯の増加により、家庭内の生活時間は一様ではなくなり、個々の活動時間や生活リズムは細分化されてきた。こうした変化は目的地へ直行する動線構成や、用途ごとに明確に分節された空間構成が一般化している。その結果、同じ住空間に身を置いていても、互いの存在を意識せずに生活が完結する状況が生まれやすくなっている。このような生活様式と住宅の関係は、現代の住宅が内包する一つの社会的背景として捉えることができる。

生活リズムの個別化による時間的分断

共働き世帯の増加や生活時間の多様化により、同じ住居に暮らしていても食事・入浴・就寝などの行為が重ならない状況が生じている。家族が同時に同じ空間に存在する機会が減少し、住居は複数の独立した生活を内包する場となっている。

機能分化・効率化された住居構成

LDK・個室・水回りといった諸室が用途ごとに明確に分節され、各室が完結した空間として計画されている。移動動線は最短化され、住居内での滞留や回遊が生じにくい構成となっている。

動線が交わらないことを前提とした空間構成

現代住居の動線計画は、他者と交差しないことを前提として成立している場合が多い。その結果、住居内で偶発的に出会う契機が生まれにくく、生活の中で他者を意識する場面が減少している。

存在が意識されにくい住居内環境

問題は家族関係の断絶ではなく、視線・音・気配といった要素が遮断されることで、互いの存在が日常の中で意識されにくくなっている点にある。人は同じ住居に存在していても、空間的には孤立した状態に置かれている。

2 敷地情報

所在地：静岡県静岡市葵区横田町 10-10

周辺：国道 1 号に近接。沿道に店舗・住宅が混在。交通量多い時間帯の騒音配慮。

特徴：古民家密集地域のため、敷地に対して住宅の密度が高い。近年は建て替え・小テナントの入替が継続。

法規（要調査）：用途地域：近隣商業地域 / 建蔽：80% / 容積：300% / 前面道路幅員：9m / 高度地区：最高限 5 種 (31m)。

本敷地は、将来的に南海トラフ地震の発生が懸念される地域に位置しており、大規模地震を前提とした安全性や居住継続性が住宅計画において強く求められる。また、都市部の極小敷地であることから、採光や景観の確保といった居住環境面でも厳しい条件を抱えている。本計画では、こうした防災性と環境性能の両立が求められる都市型住宅に対し、新たな住居像を提示する試みとして本敷地を選定した。

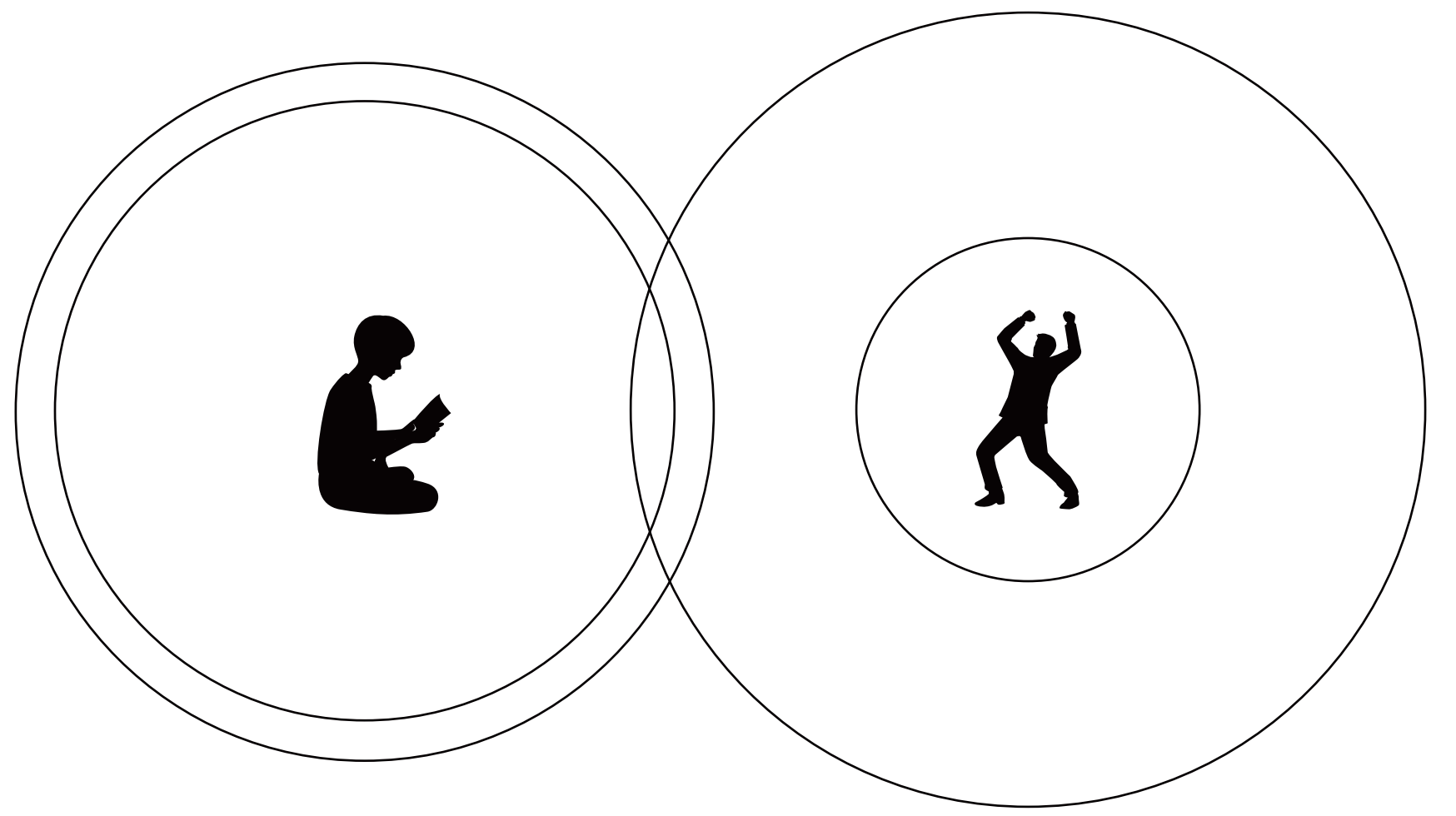


対象敷地 1/1000

3 コンセプト

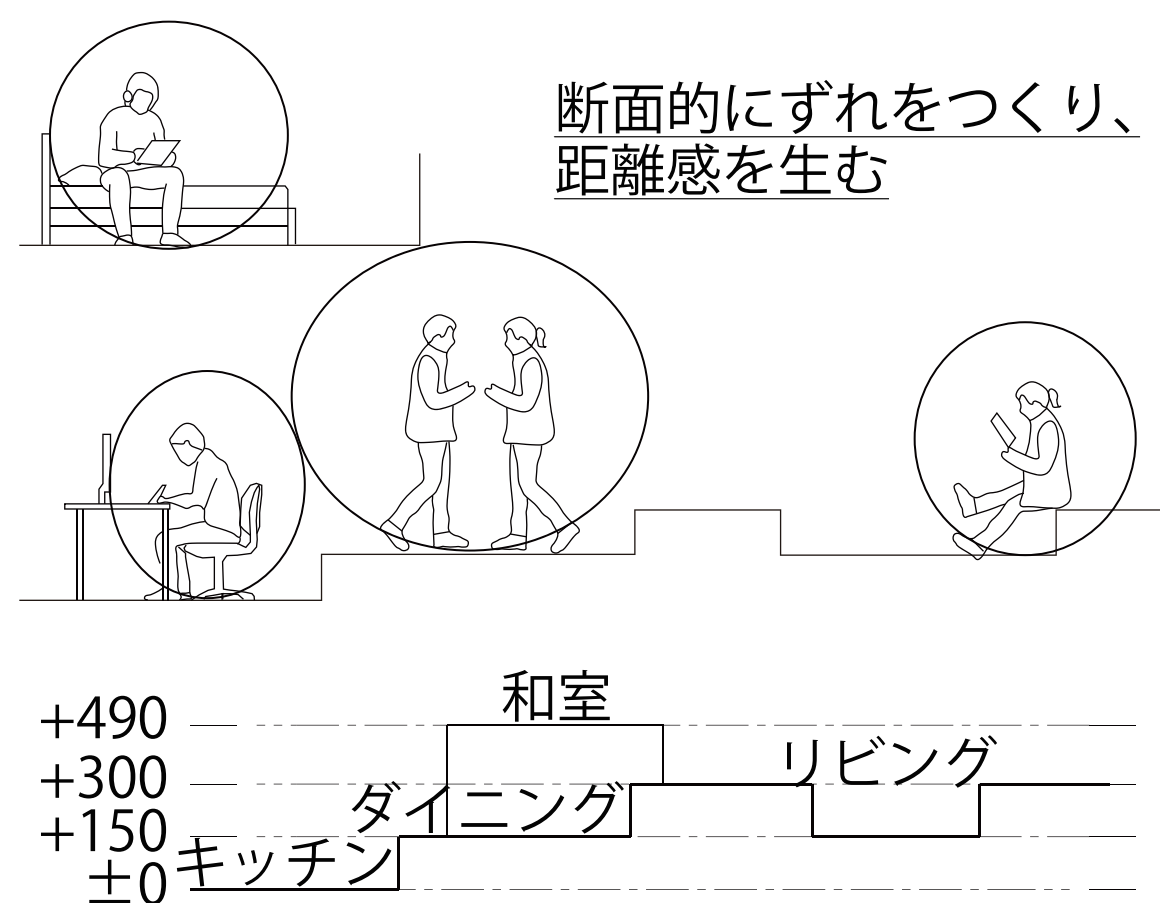
間合い～無関係にならない距離～

人は距離によって他者との関係を調整している。
本計画は、家族が互いの存在を感じながらも関係を固定しない、
「無関係にならない距離＝間合い」を住宅として内包する試みである。

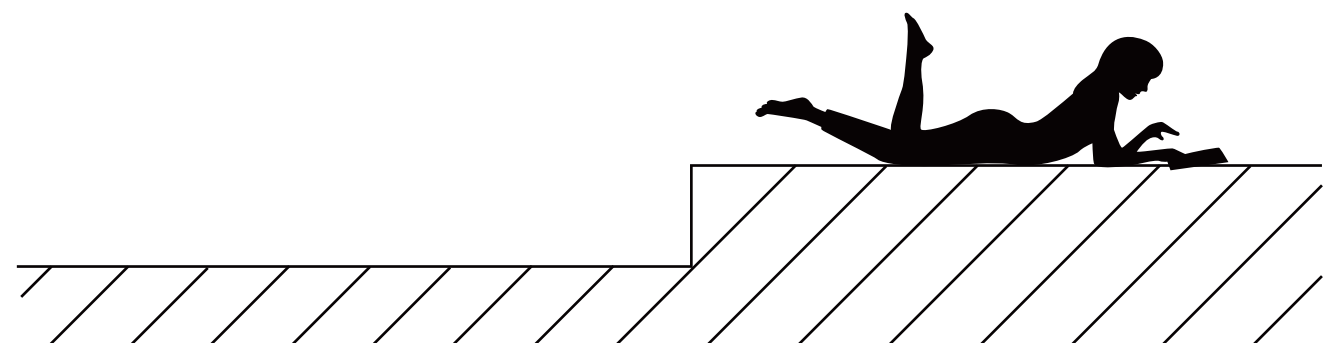


4 設計手法

間合いの視覚化



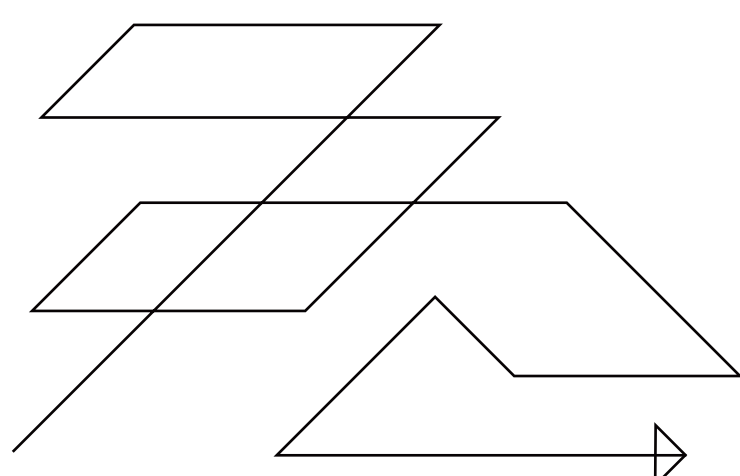
上下にズレた連続断面



完全な部屋の集合体としない構成



動線を最短化しない



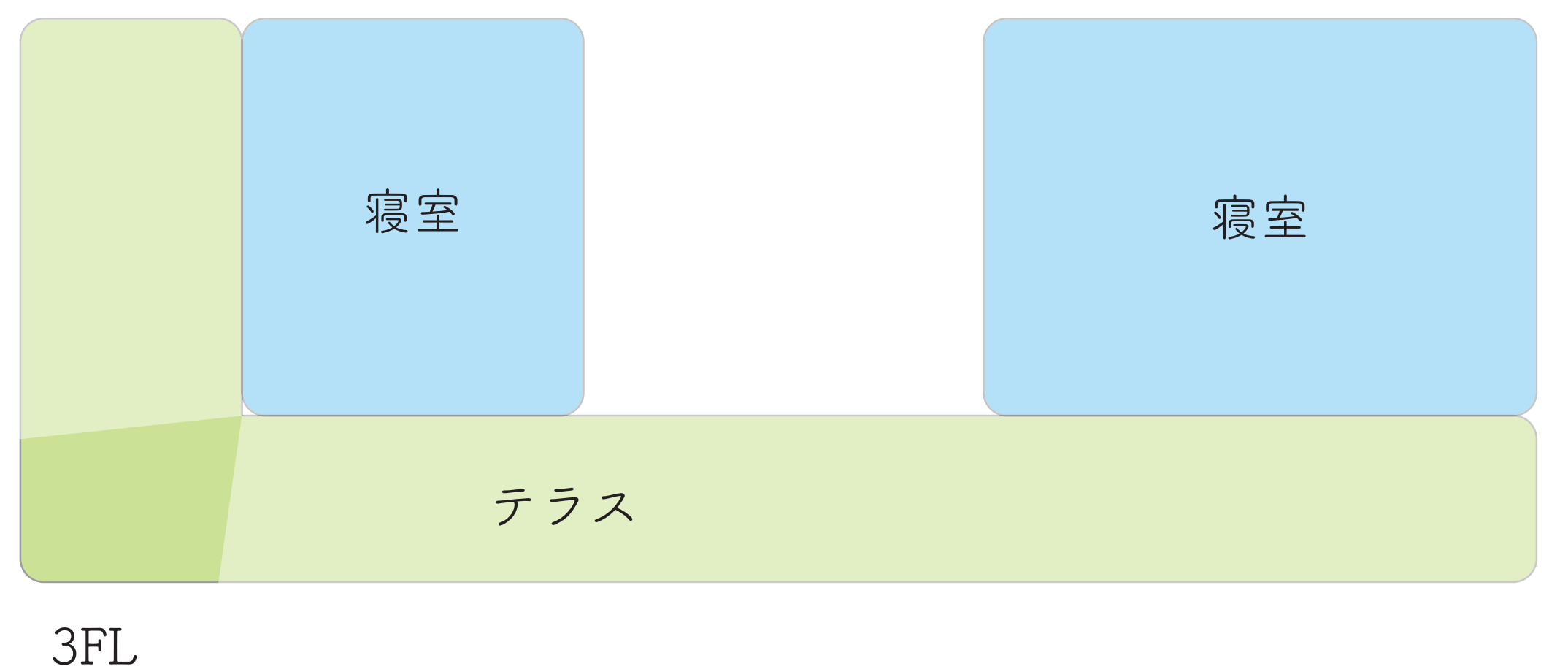
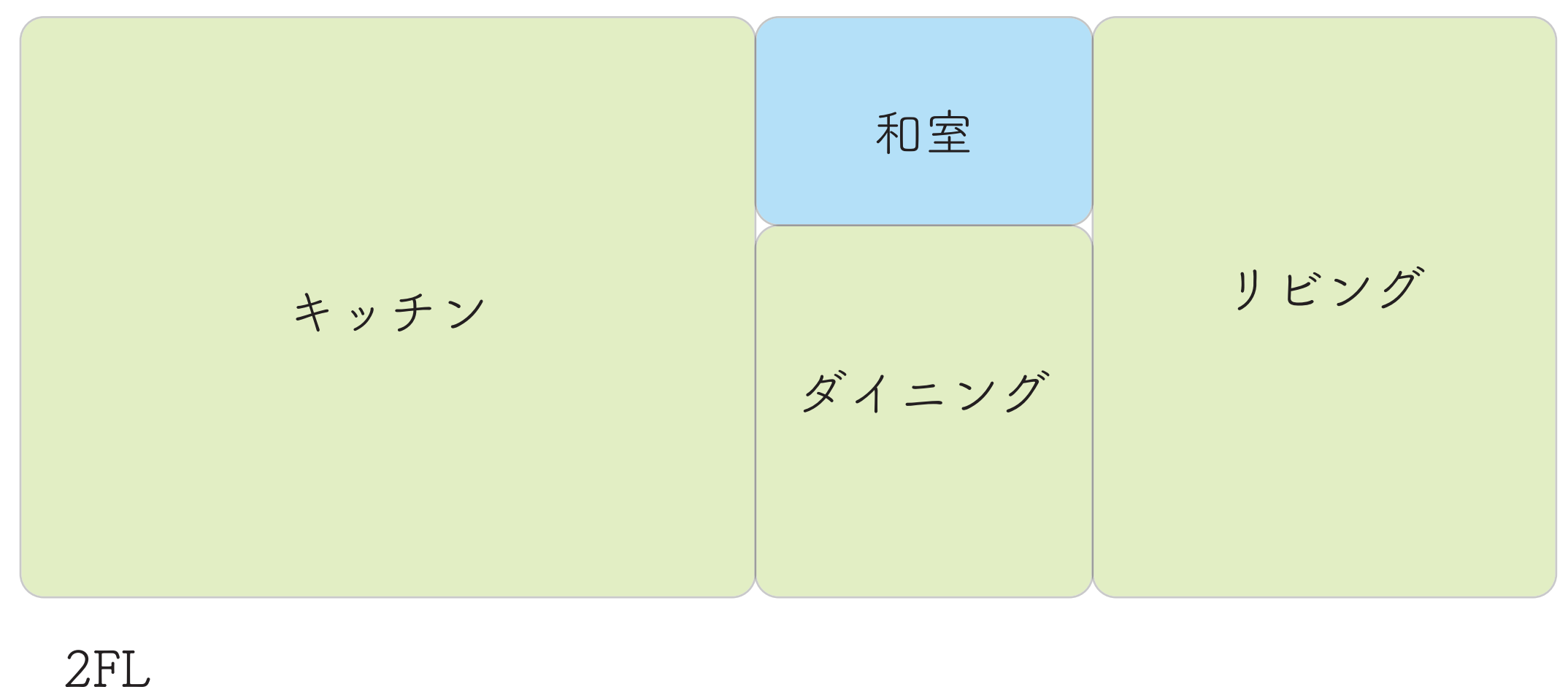
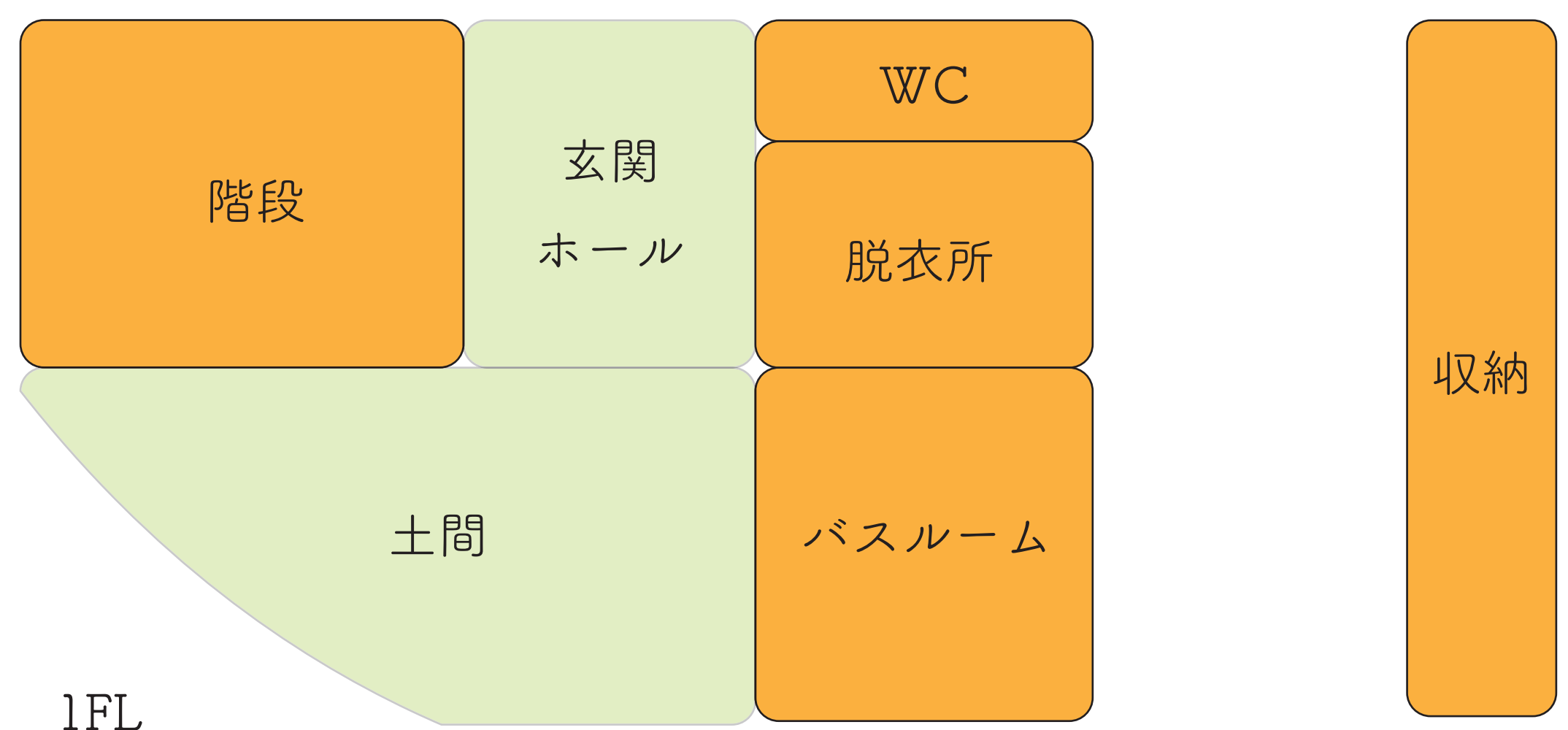
5 家族構成

本計画では、40代の共働き夫婦と中高生の子ども1人からなる3人家族を想定している。

平日はそれぞれの帰宅時間や食事の時間が異なり、同じ家にいながら生活が分断されやすい家族像である。

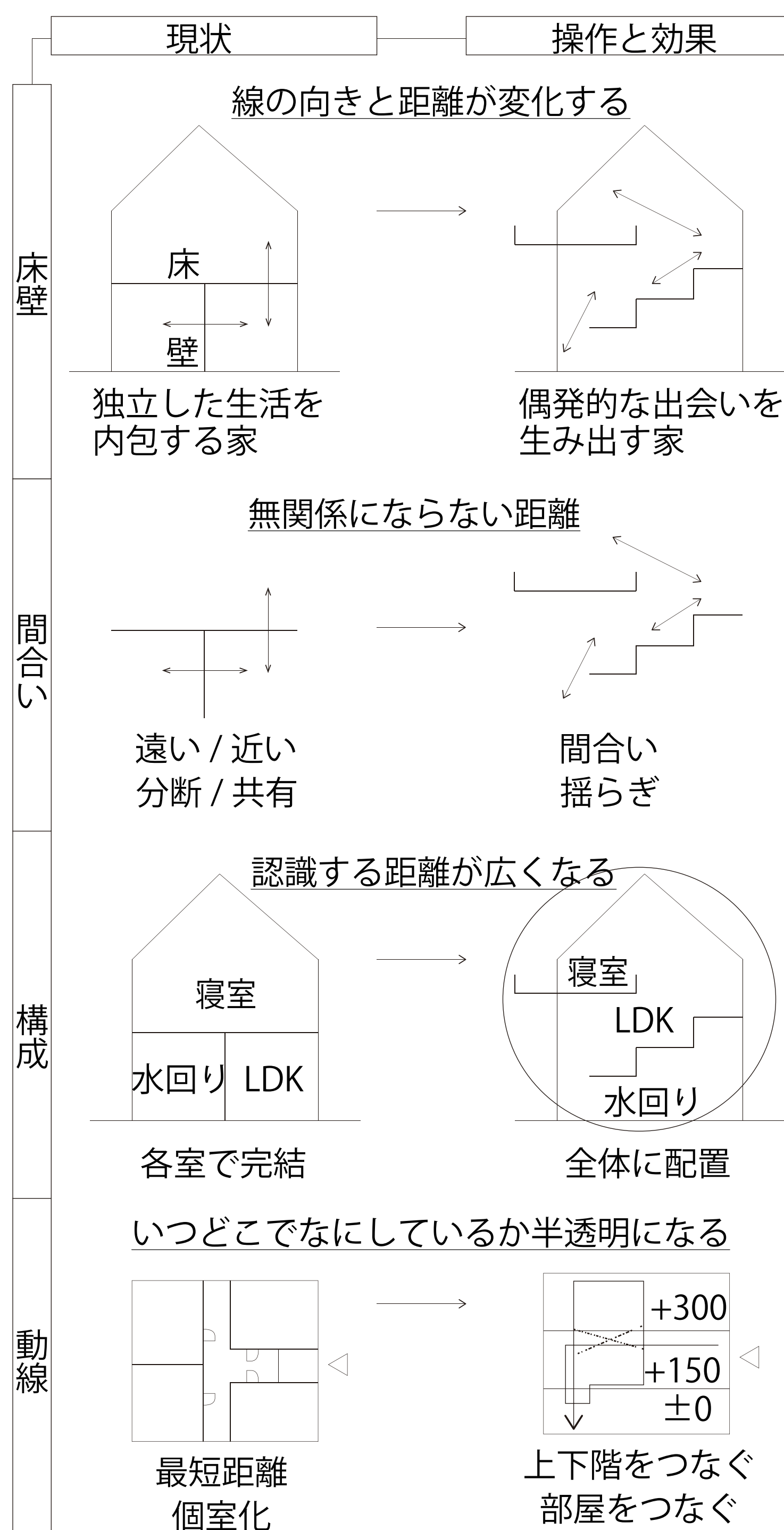
本住宅は、距離を完全に分けるのではなく、気配・音・視線がにじみ合う関係を保つことで、公私が固定されない柔らかな家族関係を受け止める住居を目指す

6 ゾーニング



7 計画

解体し、構築する



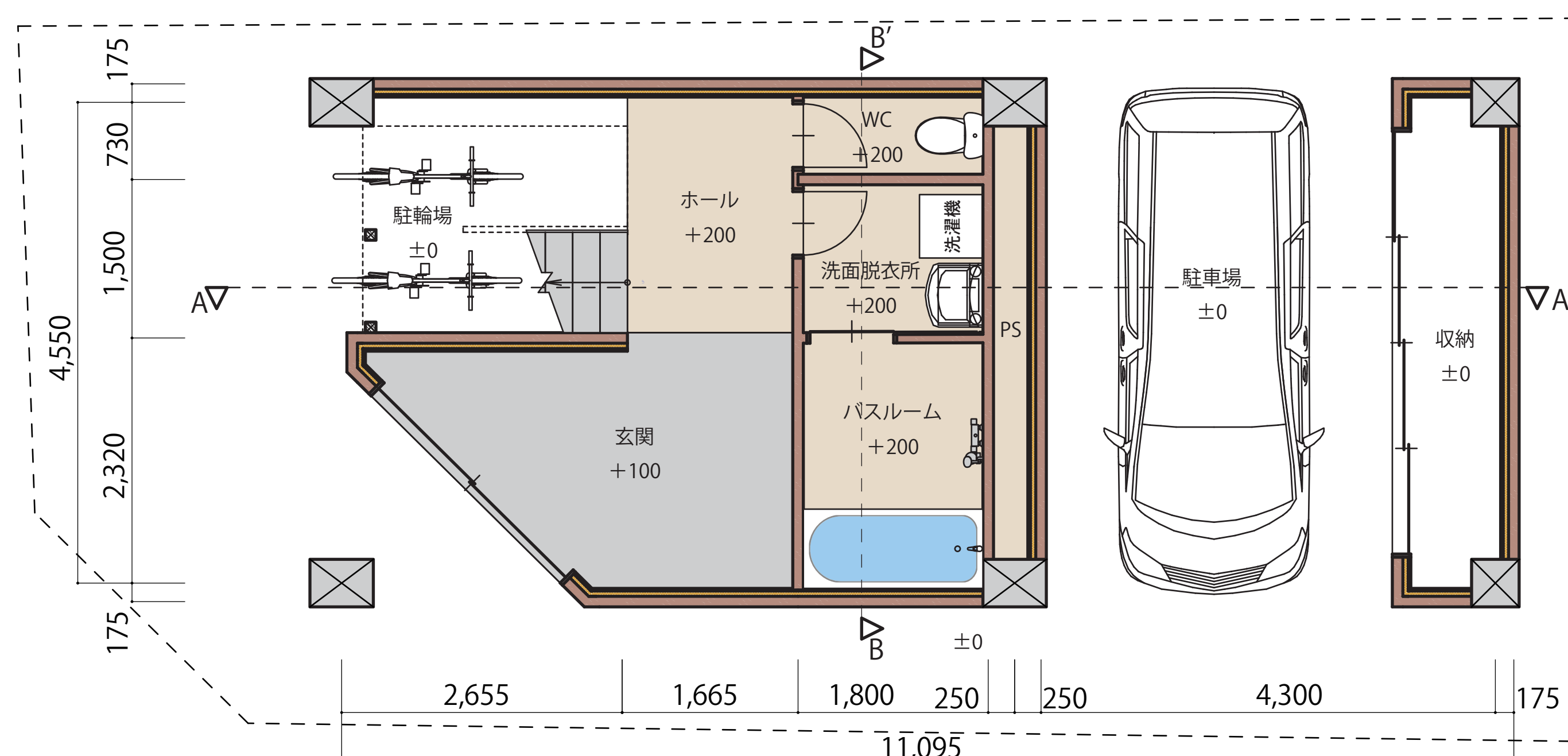
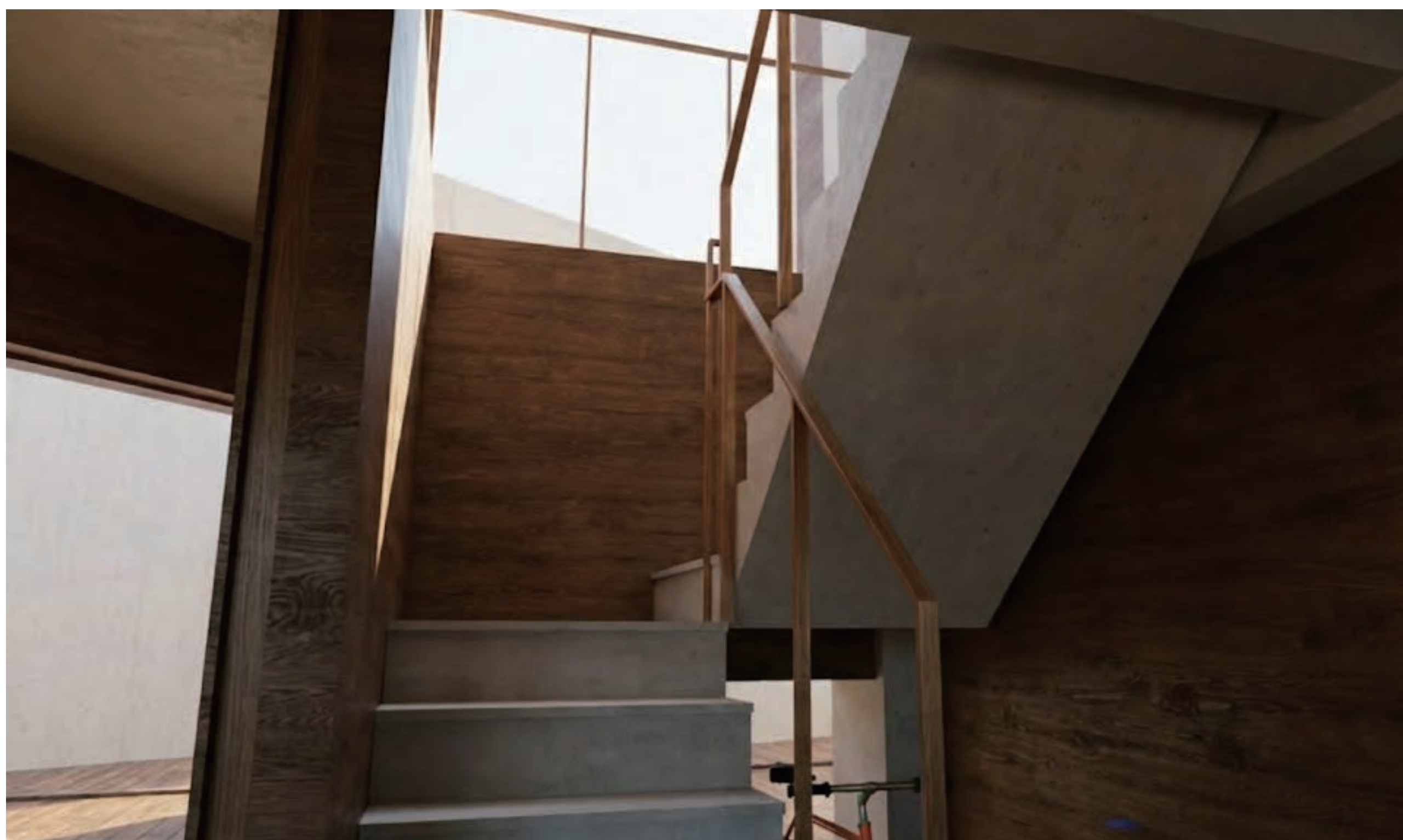
本計画では、従来の住宅において前提とされてきた床・壁・間取り・動線といった構成要素を一度解体し、それらを「関係の距離」を調整する操作として再構築している。

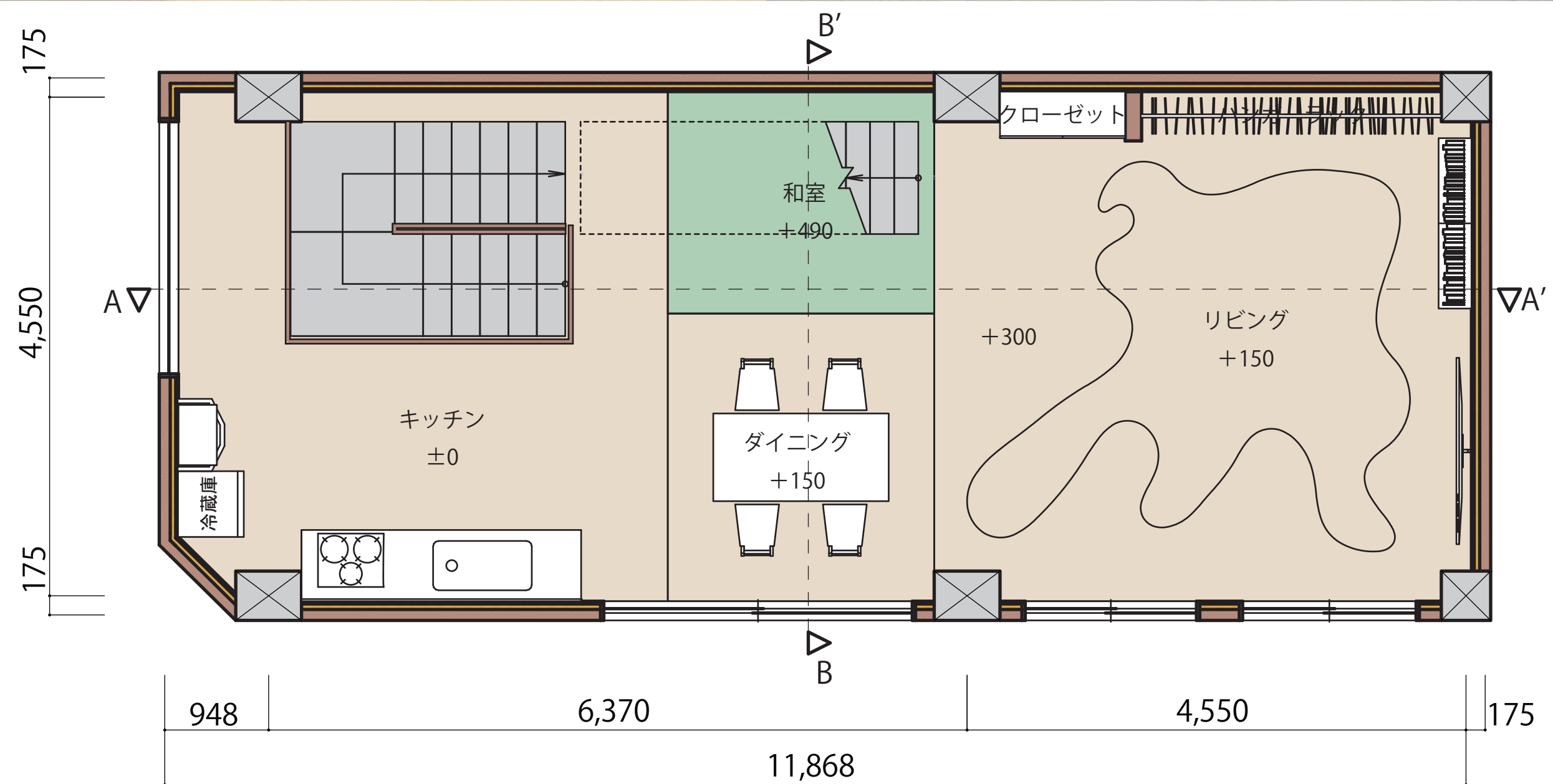
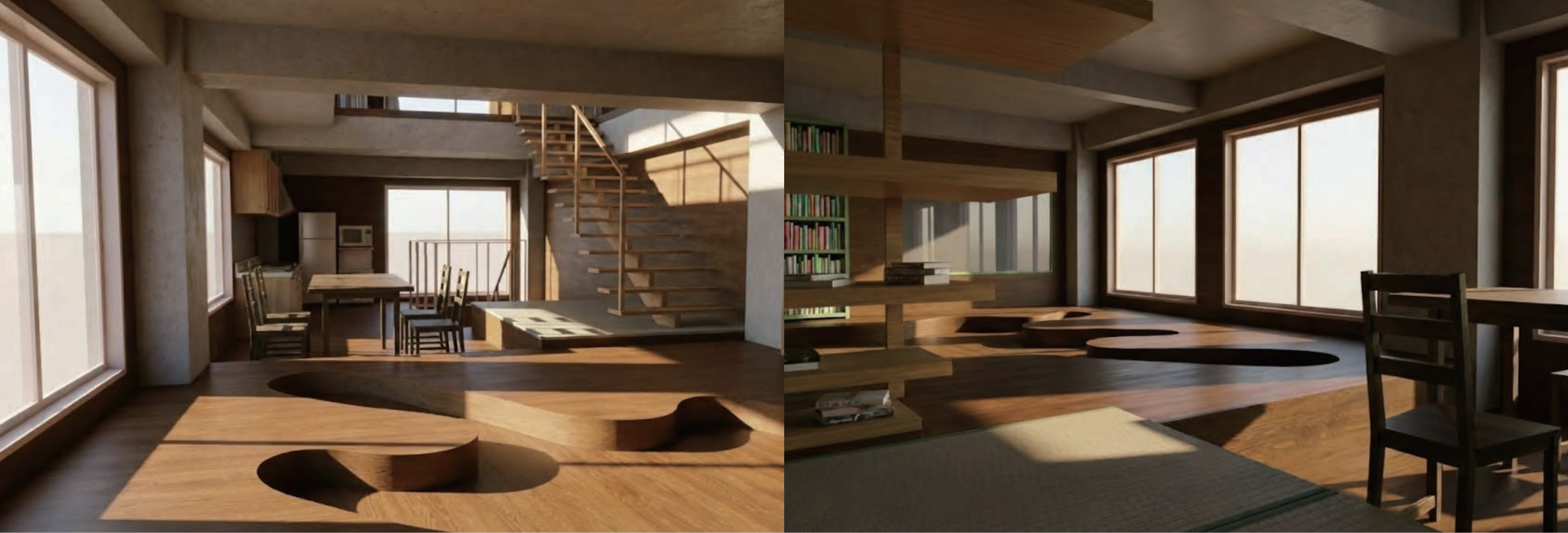
一般的な住宅では、床や壁によって生活は明確に分節され、個々の行為は独立した空間の中に内包されがちである。その結果、家族の存在は「近い／遠い」「共有／分断」といった二項対立の関係に整理されやすい。

これに対し本計画では、床レベルのずれや断面的な連続、動線の重なりを導入することで、視線や気配が必然的に交差する構造を内包させている。距離は単に縮めるのではなく、間合いや揺らぎとして段階化され、無関係にならない関係性が生まれる。

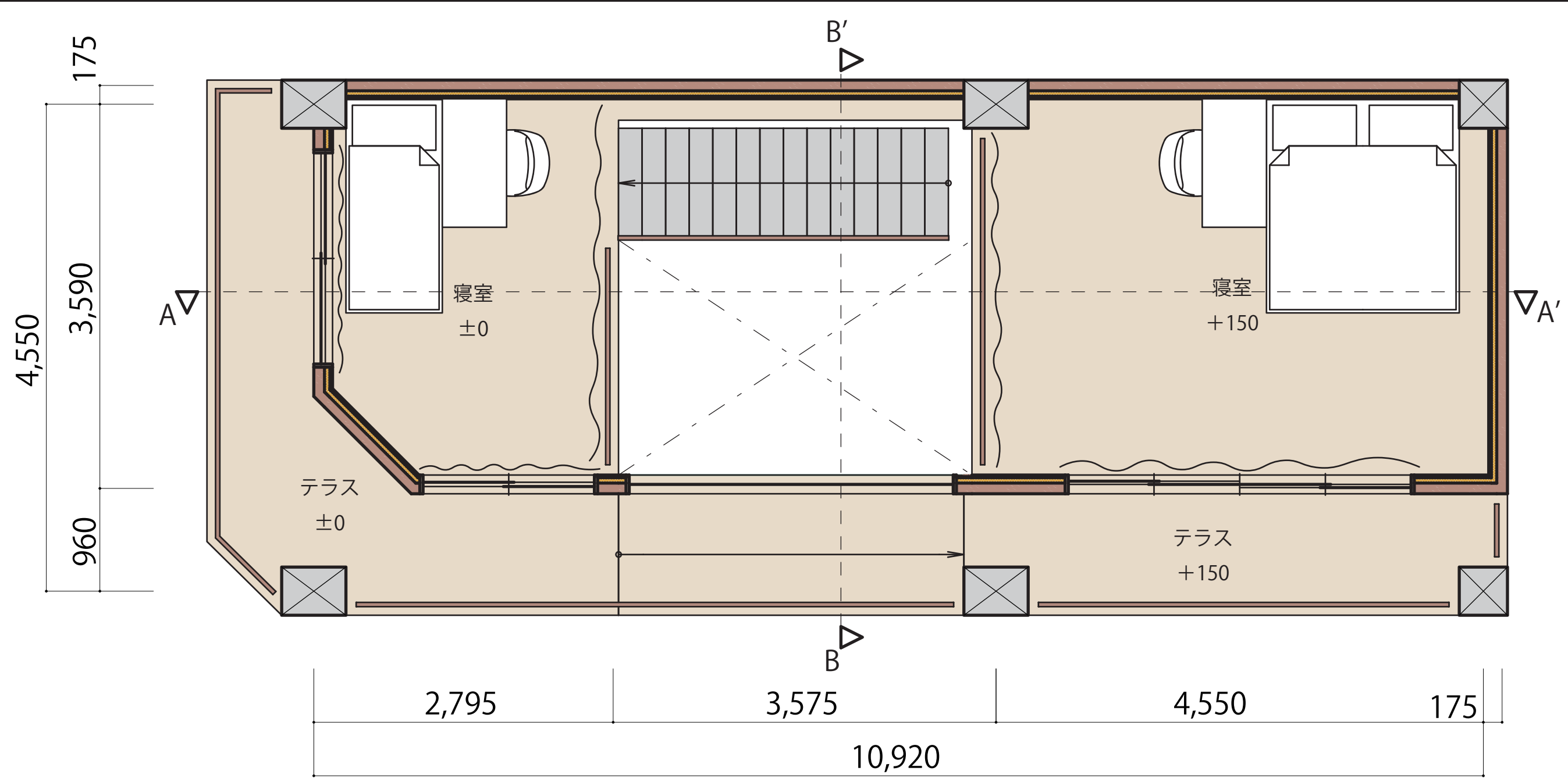
また、機能を各室で完結させるのではなく、住居全体に分散配置することで、「いつ・どこで・誰が」生活しているかが半透明に感じ取られる構成とした。

このように、床・構成・動線を操作することで、意識的な交流を前提とせずとも関係が立ち上がり続ける住宅像を提示している。



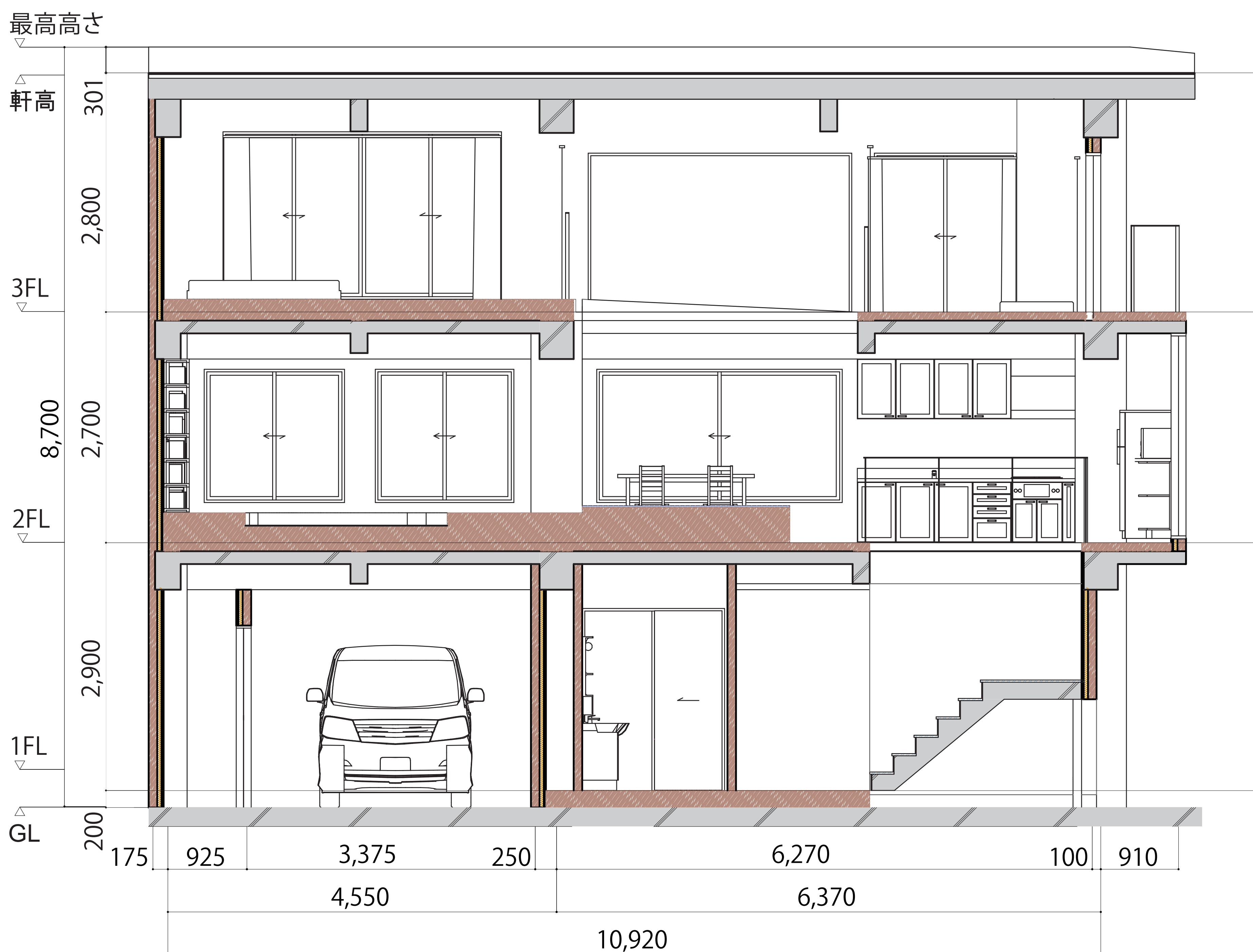


2FL 平面図 S=1/40



3FL 平面図 S=1/40





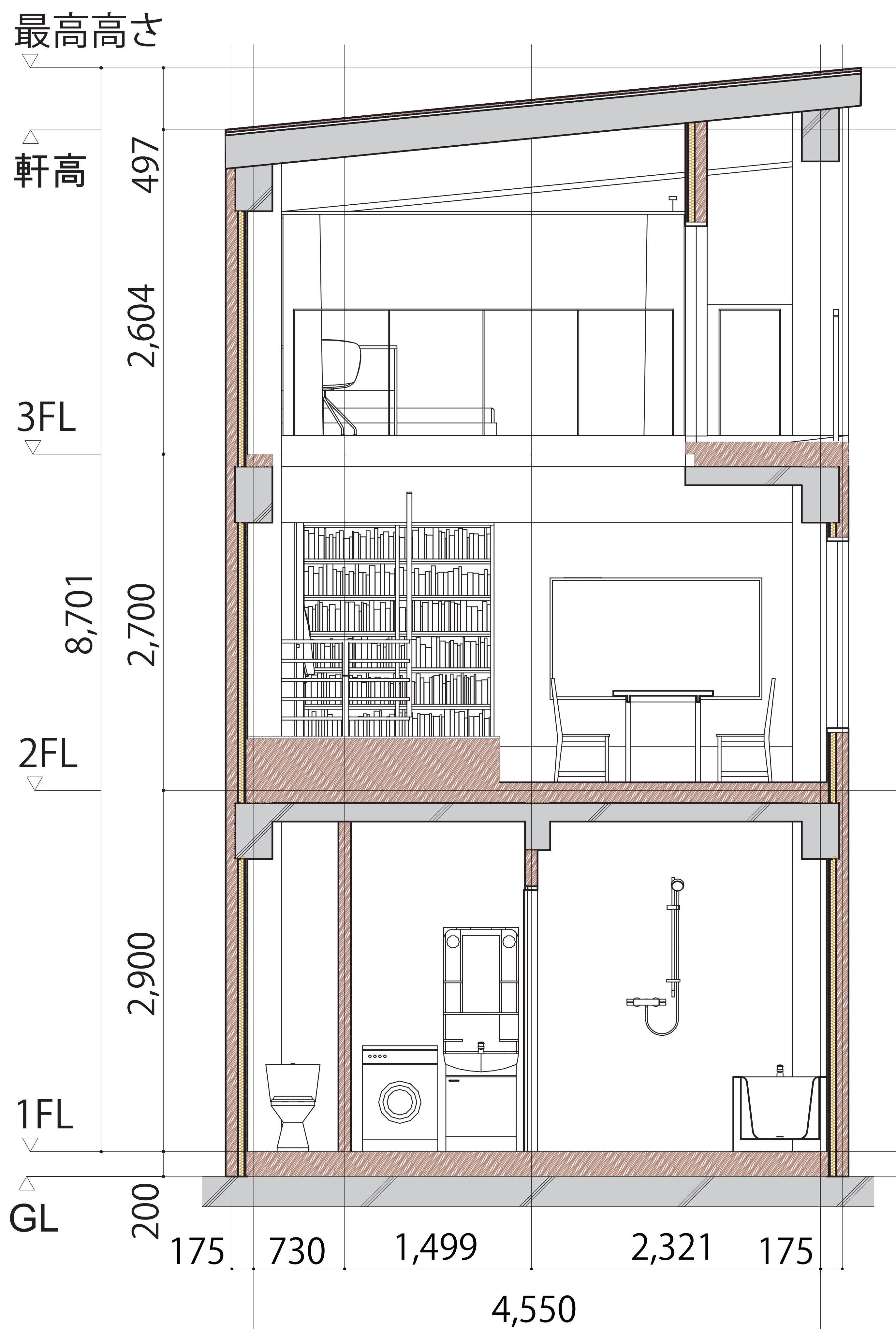
長手 断面図 S = 1/30

7 150mm の操作

本計画では、家族間の距離を調整する単位として 15cm の段差を用いている。この寸法は、声や生活音、視線といった気配を完全に遮断するほど強くはない一方で、同一床面として一体化してしまうことも防ぎ、極めて弱い境界として機能する。

15cm の高低差によって、音は明確な情報としてではなく背景的な気配として伝わり、視線も自然にずれることで、互いの存在を感じながらも関係が過度に固定されることを避けている。上下関係や舞台性を生まないこの段差は、同じ空間にいても居方や関わり方に微妙な差を生み出し、関係の密度をその都度調整する余地を与える。

また、この段差は跨ぐことも留まることも容易であり、住み手の行為を強制しない。関係に踏み込むか、距離を保つかといった選択が、無意識の身体操作として行われる点に特徴がある。15cm は単なる寸法設定ではなく、干渉しすぎず、しかし離れきらない家族関係を成立させるための「距離」として位置づけられている。



短手 断面図 $S = 1/20$

8 挑戦

本計画では、家族の関係性を交流や機能配置によって固定するのではなく、「距離の操作」として建築化することに挑戦した。部屋の用途や明確な分離によって関係を決める従来の住宅に対し、床レベルや視線、動線の重なりによって、関係が揺らぎ続ける状態をつくっている。

集まることを前提とせず、離れきらない状態を許容することで、変化する家族関係に対して硬直しない住宅のあり方を提示している。

7 環境・構造

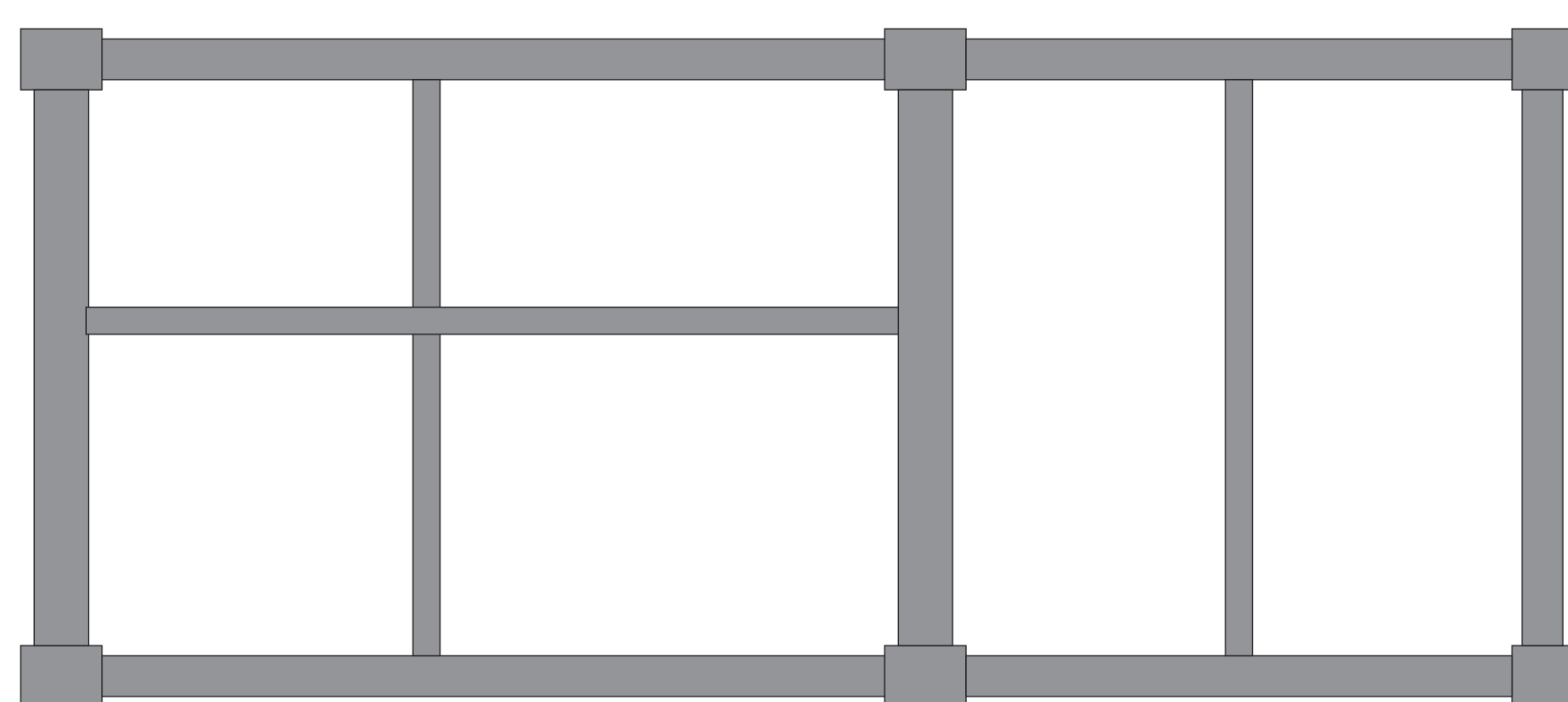
南・東から得られる自然光と風を住居全体に巡らせるため、床レベルに段差を設けた断面的な構成と、上下階を連続的につなぐ空間構成を採用した。光や風を特定の部屋に閉じ込めるのではなく、吹き抜けやレベル差によって生まれるずれた空間を介して拡散させることで、住居全体に均質ではない環境の流れをつくり出している。

これにより、家族の居場所は分かれながらも、光や風といった環境要素は共有され、空間ごとに異なる居場所性を保ちつつも、同じ住居にいる感覚が失われない構成としている。

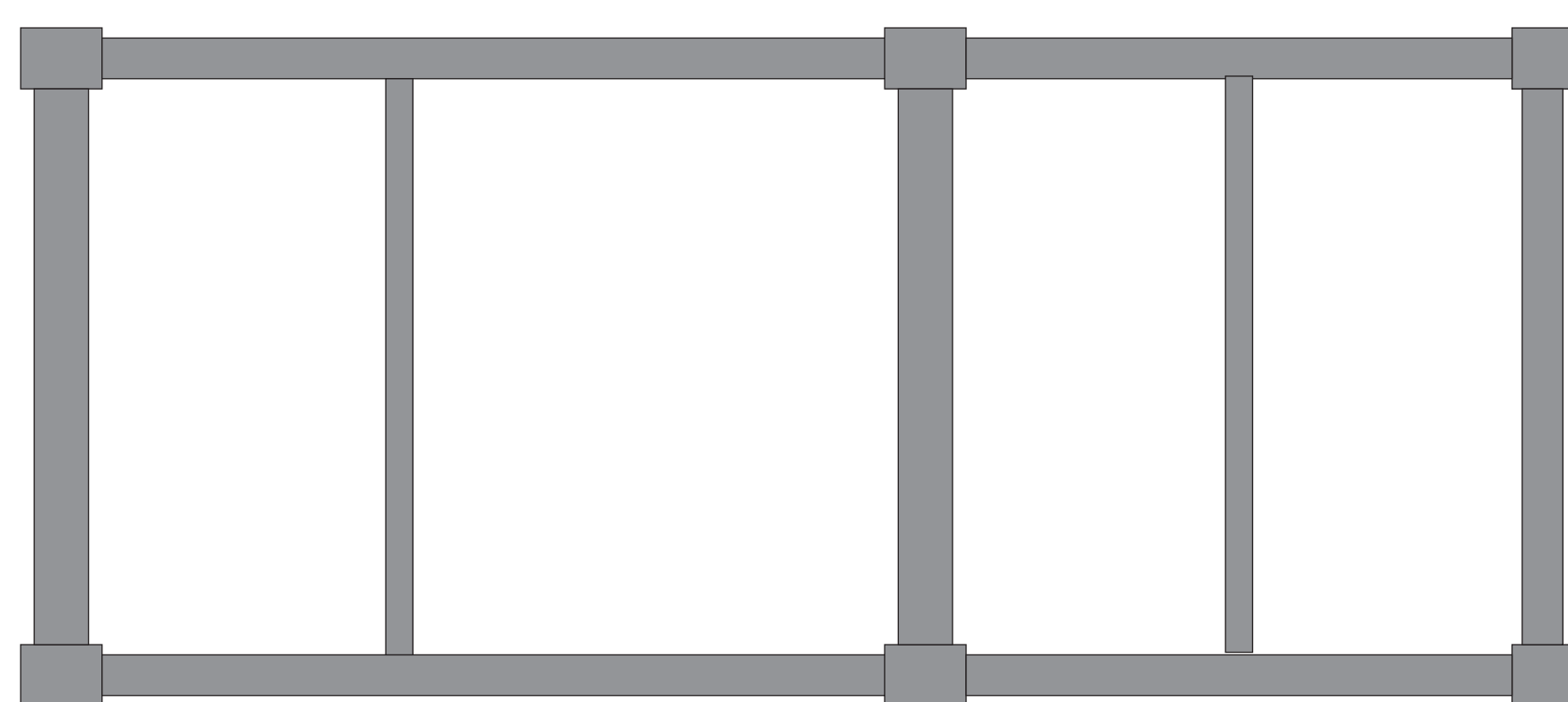
建物の骨格には RC 柱（450×450）を採用し、将来的に想定される大規模地震に対する耐震性を確保すると同時に、上下階を貫く明確な構造フレームを形成している。柱を構造の主軸として計画することで、耐力を柱に集約し、間仕切り壁への構造的依存を極力減らした。

これにより、住居内部には壁によって細かく分断されない抜けのある空間が成立し、断面的な連続性や床レベルの操作といった空間的な試みを、構造的な裏付けをもって実現している。

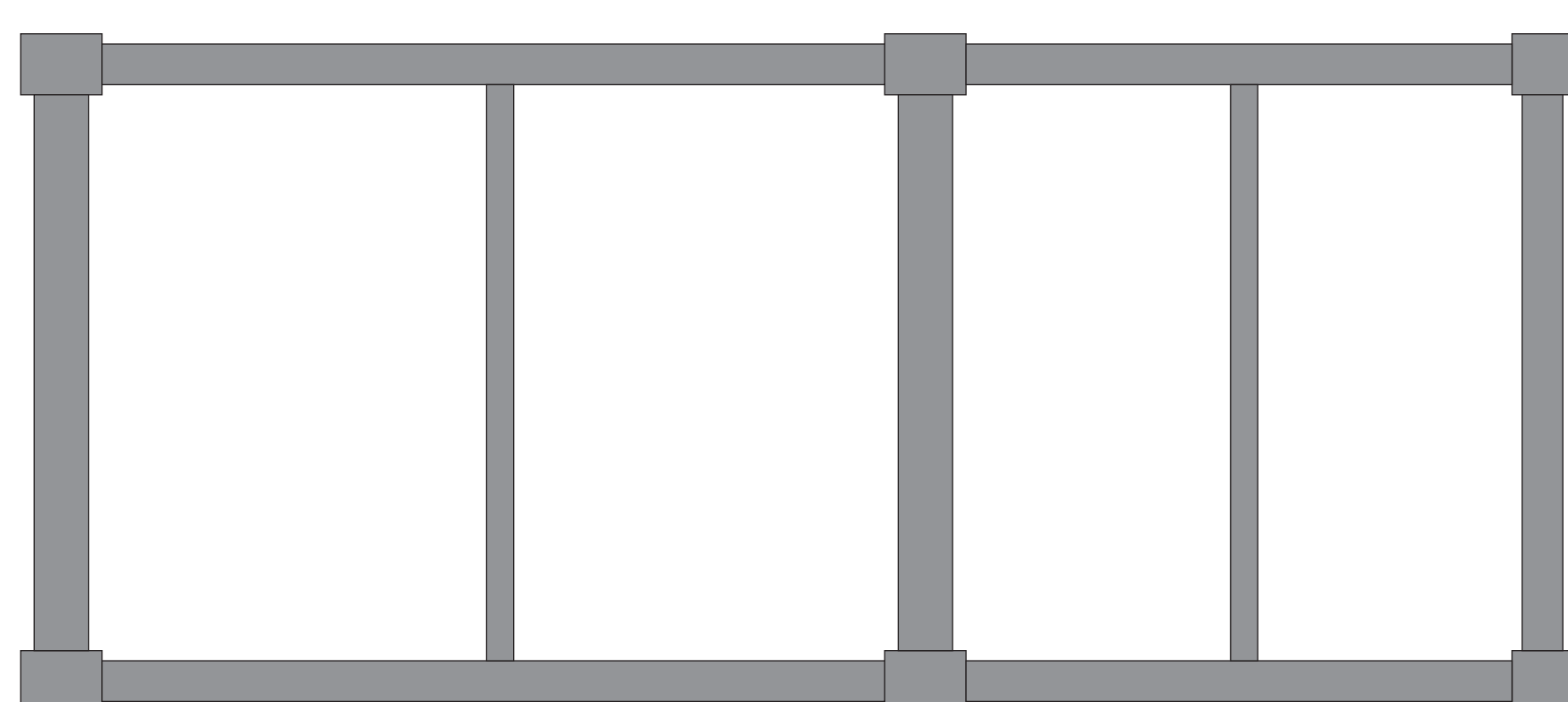
梁伏図 S=1/50



1FL



2FL



3FL

採光と風の確保

